

タイトル：2020年度教育セミナー（第16回）

日時：2020年9月17日（木）～20日（日）

オンライン開催

「奴隷軍人」とサファヴィー帝国」

前田弘毅（東京都立大学）

本報告では、サファヴィー朝イランのシャーに仕えたコーカサス出身「王の奴隷」集団について取り上げた。はじめに、イスラーム世界の「奴隷」の特徴及び「奴隷軍人」研究の問題点について述べた。ムスリムの子は奴隷にならないことから、イスラーム世界では奴隷は「異世界出身者」の属性を帯びる。そして、支配エリートとしての奴隷について、アヤロンの一世代限りの貴族制というテーゼを紹介した。

その上で、サファヴィー帝国第5代シャー・アッバース一世の改革で活躍した「王の奴隷」集団（ゴラーム）について検討した。彼らはグルジア（ジョージア）、アルメニア、チェルケス人など「コーカサス」出身であり、シャーのハウスホールド運営の一翼を担った。

彼らの出身地であるコーカサス（カフカス）という場は東西をカスピ海、黒海に挟まれた地峡であり、最高峰エルブルース山（5642メートル）は「ヨーロッパ」最高峰としても知られる。ユーラシアにおける言語の「滞留ゾーン」としても知られ、峻険な山並みと複雑な地形により、多様な自然環境と多言語・多民族の環境が維持されてきた。

この地域の最古の文語の一つがグルジア（ジョージア）語であり、サファヴィー帝国に仕えたゴラームの出自の特定にも利用することができる。グルジア語史料はユーラシア史の目撃者ともいえ、5世紀以来のグルジア文字による文学伝統を有し、王国興隆にともない、歴史書執筆もさかんになった。

ペルシア語に加えて、グルジア語史料も利用して流入の経緯について検討すると、ゴラームが戦争捕虜であった事例はほとんど確認できない。また、一世代では無く、兄弟・親子で地位が継承され、さらに特定の家系が傑出しており、数世代にわたって活動が継続していることも確認できる。とりわけグルジア系が突出している。バラタシュヴィリ、ミリマニゼ、サアカゼ、ウンディラゼの4家系だけで60名近くの高官を輩出した。また、こうした家系の活動を紹介する中で、様々な史料の属性についても触れた。

9C末に勃興したバグラト朝グルジア王国は、11-13Cの最盛期を経て、19世紀まで存続した。サファヴィー帝国とオスマン帝国はアマシヤ条約（1555年）でグルジアを東西に分割したが、タヴァディ（貴族ないし大豪族）とアズナウリ（豪族）という豪族集団は侵略に対する軍事的抵抗の核となると同時に、帝国権力中枢に活躍の場を見いだしていたのであった。アッバース一世の対コーカサス政策の核心はコーカサス住民の王のハウスホールドへの強制的取り込みであった。商人集団として活躍したジョルファ・アルメニア人の例もよく知られる。グルジアについては、住民の大規模な捕囚とイラン内地への強制移住（特に最東部のカヘティ王国住民）により、たとえば今日でも400年前のグルジア語を話すフェレイドゥーンシャフルのグルジア人集団の例も知られている。一方、アッバースの側近ギオルギ・サアカゼによる大規模反乱（1625年）など、統合政策の揺り戻しともいえる事件も発生した。すなわち、通説とは異なり、郷里との交渉の中にもサファヴィー帝国のゴラームを位置づける作業が必要なのである。